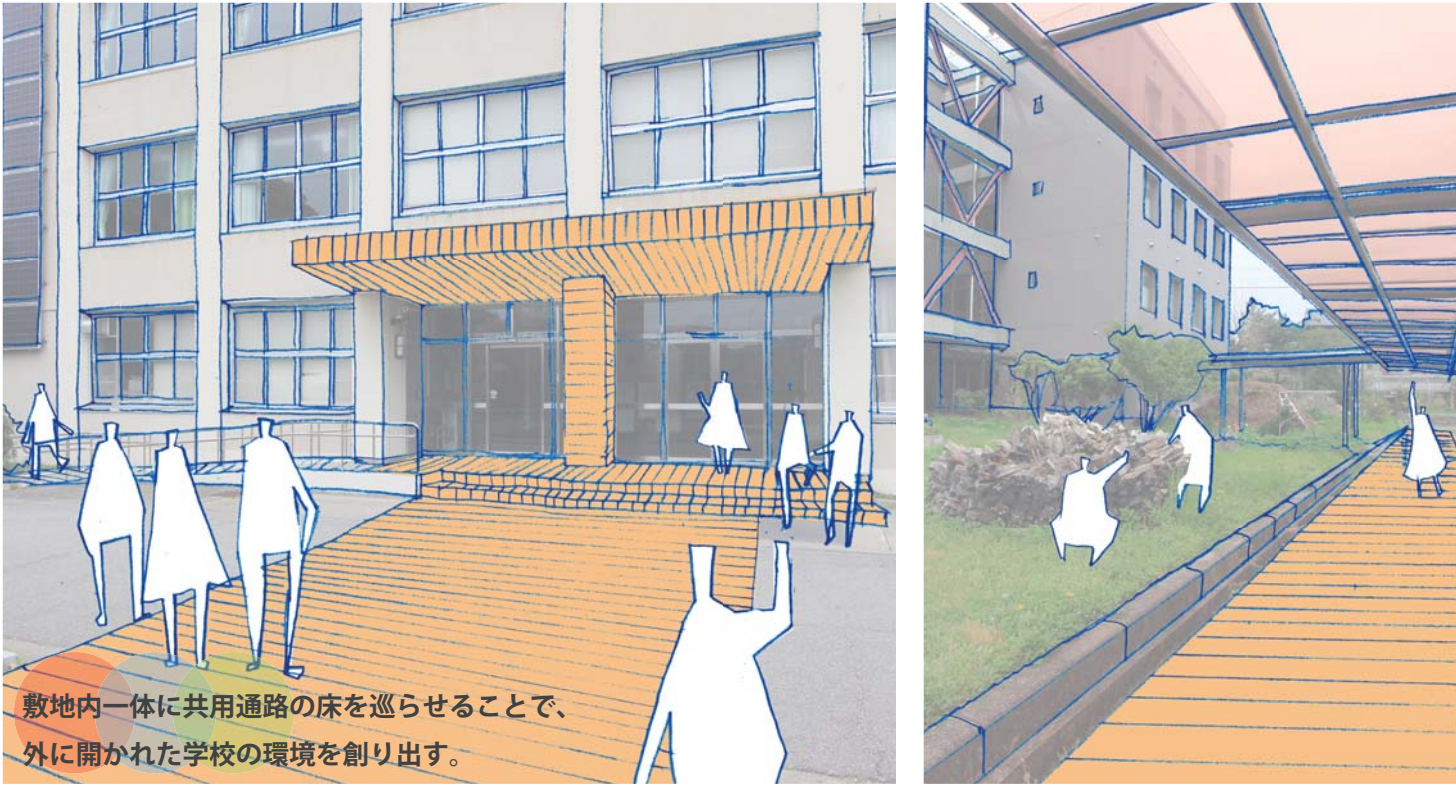
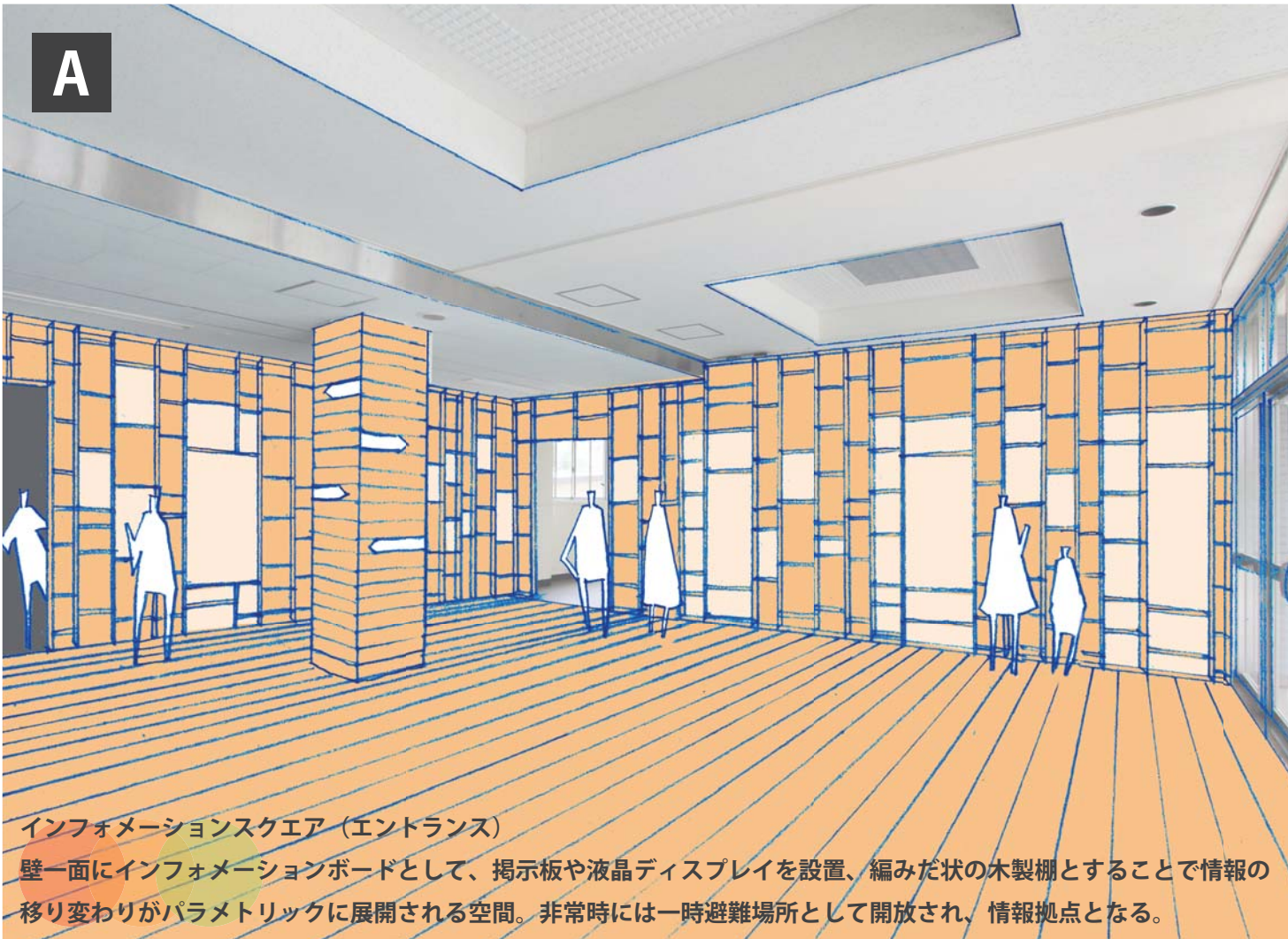


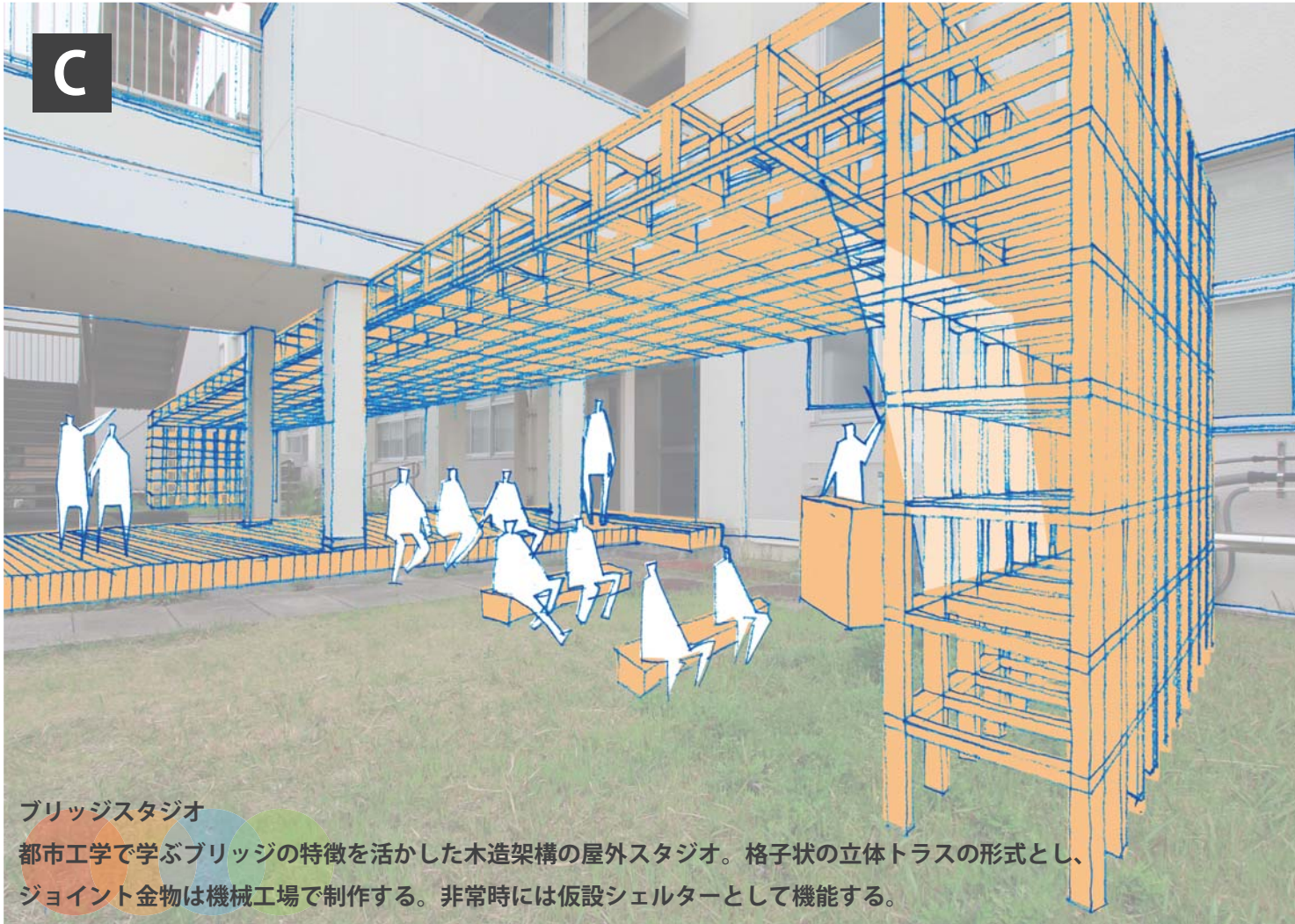


敷地内一体に共用通路の床を巡らせることで、外に開かれた学校的环境を創り出す。



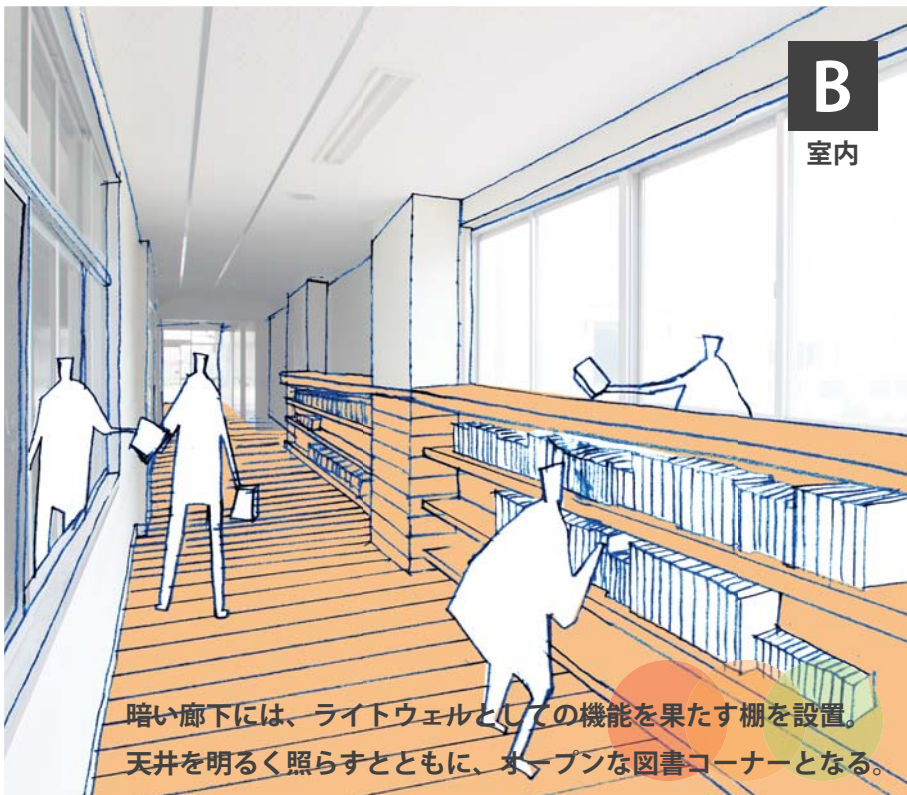
インフォメーションスクエア（エントランス）

壁一面にインフォメーションボードとして、掲示板や液晶ディスプレイを設置、編みだ状の木製棚とすることで情報の移り変わりがパラメトリックに展開される空間。非常時には一時避難場所として開放され、情報拠点となる。



ブリッジスタジオ

都市工学で学ぶブリッジの特徴を活かした木造架構の屋外スタジオ。格子状の立体トラスの形式とし、ジョイント金物は機械工場で作製する。非常時には仮設シェルターとして機能する。



B

室内

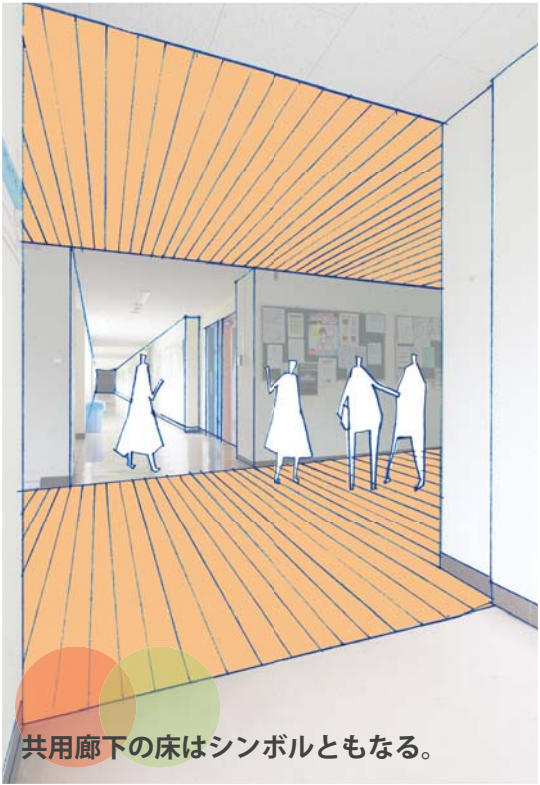
暗い廊下には、ライトウェルとしての機能を果たす棚を設置。天井を明るく照らすとともに、オープンな図書コーナーとなる。



B

屋外

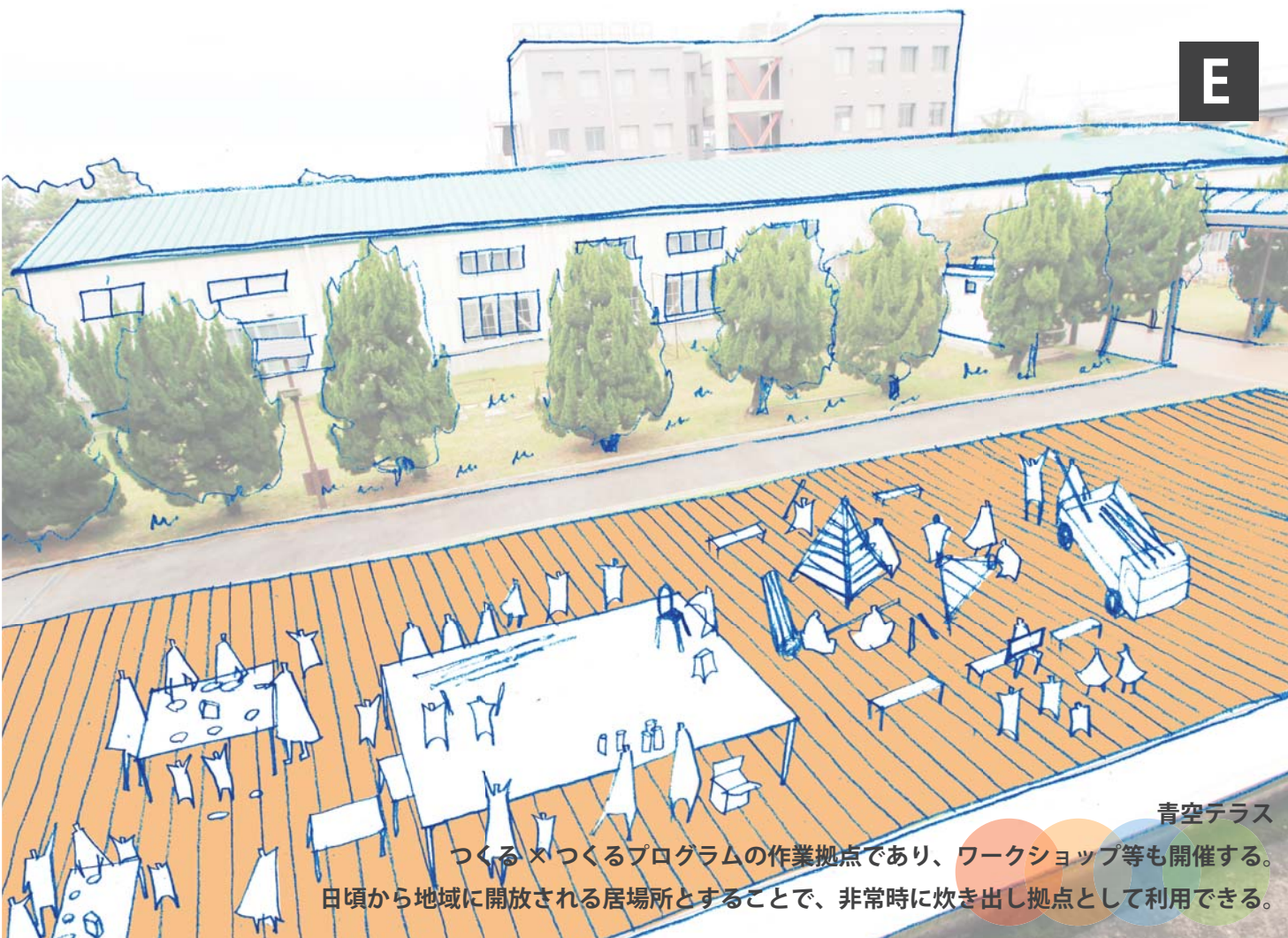
外部とのつながりをつくり、光と風の流れる豊かな環境となる。



共用廊下の床はシンボルともなる。



ロングベンチは日常の休憩に。非常時にはかまどや食糧備蓄として機能する。



E

青空テラス

つくる×つくるプログラムの作業拠点であり、ワークショップ等も開催する。日頃から地域に開放される居場所とすることで、非常時に炊き出し拠点として利用できる。

モノコトスケープ

- 異種共創が生むランドスケープ -



ものづくりの喜びは、作ることから始まり、様々な出来事を通して、使い手に愛される物になることだと思います。この喜びの機会を学生自ら創造し享受できる環境を提案します。全生徒が行き来する1階の共用廊下に学科の枠を超えたシェアスペースを設けます。ここでは、学生が身に付ける知識や技術を領域横断的に融合させた空間や設え【知層の空間】を学生の共創により制作します。制作プロセス【つくる×つくるプログラム】では、学生同士の交流のみならず地域住民を交えることで地域社会に開かれた環境をつくります。物と出来事が織りなすシーケンスのなかに、知の集積の様相が見えてくると考えます。

【共用廊下の可能性】

各棟を結ぶ共用廊下は、多くの学生が行き交う道であり、授業の合間の移動や休憩の居場所にもなります。また外の空気を感じ取れる場所であり、外部空間との中間的領域となっています。ただ現状は少し薄暗く決して魅力的な空間とは言え無いです。本提案では、共用廊下を舞台に学生同士や地域住民の方との交流の場を提案します。



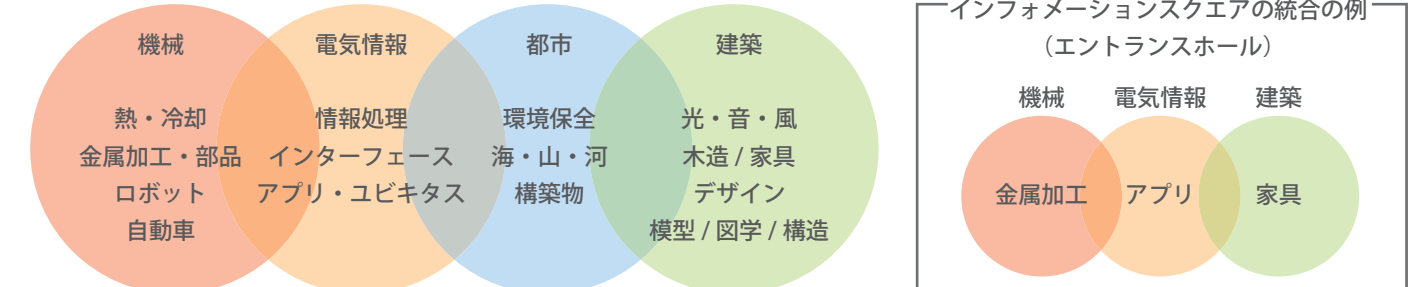
【日常のシェアスペース / 非常時のサブドスペース】

学生の交流の場として、共用廊下とそれらを取り巻く環境を一体としたシェアスペースを計画します。学生が情報や物やイベントを発信して共有する場としてのシェアスペースです。それらの空間は、地震などの非常時には、緊急警報や情報収集を行うことが出来たり、シェルターとしての仮設避難所として活用出来たり、備蓄用品を格納していたり、学生自身の安全を守るだけでなく、地域住民の一次避難場所としての機能の一助となります。

場所	【空間（地層の空間）】	日常	非常時
エントランスホール	A インフォメーションスクエア	情報発信・共有	緊急警報や情報収集
機械・建築棟南側	C ブリッジスタジオ	ミニ講座・レクチャー	仮設シェルター
電気情報・都市工学棟北側	D ロングベンチ	休憩場所	かまど・食糧備蓄
機械工場前	E 青空デッキ	ワークショップ等	炊き出し拠点

【知層の空間】

4つの学科、それぞれで学ぶ知識や技術を統合したデザインとすることで、より実践的な空間を構築できると考えます。それぞれの学科の特徴を空間のなかで重層させ、具現化することによる地層の空間を目指します。

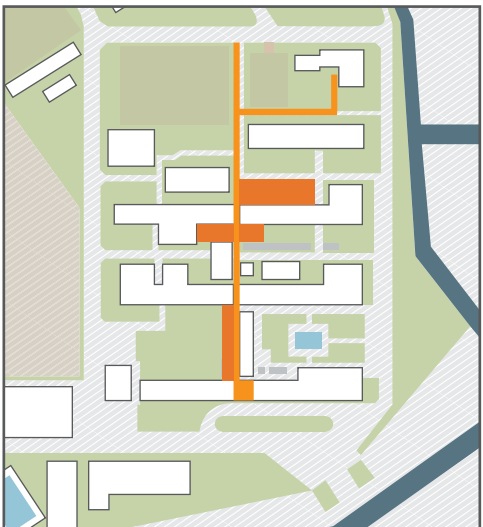


【つくる×つくるプログラム】

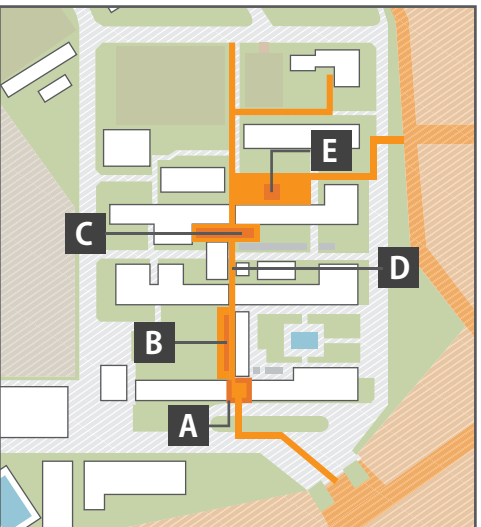
学習プログラムの一環で、他学科の学生と協働してものづくりを実践するプログラムを提案します。身近な空間を自分たちで作り、メンテナンスしながら活用していくことから学ぶことは多いと考えます。また、地域住民の方との制作ワークショップを開催して、地域に開かれる環境づくりを目指します。



分棟の校舎を結ぶ共用廊下
学生全員が行き来する道



共用廊下にシェアスペースを拡張



「つくる×つくるプログラム」により
地域に愛される知層の空間が完成する